

月例研究会（2022年12月3日）

『〈サラリーマン〉の文化史 ——あるいは「家族」と「安定」の近現代史』を刊行して

鈴木 貴宇

本報告は、大原社会問題研究所と社会政策学会の労働支部会共催というかたちで、2022年8月下旬に刊行した拙著『〈サラリーマン〉の文化史』（青弓社）について、そもそもなぜこのようなテーマの研究をはじめたのか、またその要諦および今後の研究課題などを提示したものである。今回の研究会が通例とは異なり、社会政策学会との共催ということからも察せられる通り、拙著の研究領域は徹頭徹尾「学際」的なものであった。注意すべきは、この用語は2000年代以降、すっかり定着したかのようだが、風通しがよい反面、評価軸が立てにくいという問題があることだ。

これは報告者が学術博士の学位を授与された博士論文を書籍化したものだが、実際には学部以来、「日本近代文学」の研究領域で積み重ねてきた知見をもとにしている。刊行後も、おおむね読者は文学関係者であり、どうやら全体的な評としては「社会学的な方法に基づいた文芸評論（!）」というものに落ち着きつつあるようだ。

書籍として流通している以上、作者の意図と無関係に受容されるものと覚悟はしている。だが、大学の教壇に立つようになって10年少し、その間、研究者として発言してきた身からすると、「文芸評論」と総括されてしまうことはさみしくもある。そのような気持ちを抱えている

最中、労働史をはじめとする研究者をオーディエンスとする場で発表の機会を得たことは幸いであった。テキスト分析としてもある程度の完成度を持たせたいとの狙い通りともいえるが、本来の目的は、日本社会ではなぜサラリーマンを「普通の人」（平均的な男性労働者）として感受してきたのか、を明らかにするためであった。これは、何をもって日本社会は「普通」と予期するのか、という疑問とセットでもあった。拙著では、明治20年代から戦後の高度経済成長までという、約半世紀以上にわたるサラリーマンたちの歴史を扱っており、このタイムスパンでわかるように、結果的に「日本資本主義」とその定着を、サラリーマンの表象を通してみることになった。

報告者が労働史研究の領域に関心を持ったきっかけは、第五章で取り上げた旧全銀連の機関誌「ひろば」とその復刻に携わったことだった。この作業を通じたことで、労働組合や女性労働者、また非正規雇用の実体といった、イメージだけでは語りえない「現実」の重みに触れることができた。サラリーマンの研究は、欧米の日本研究にあつては、ほぼ日本人男性のイメージ研究と同義であり、それなりの蓄積もなされている。しかし、本来、サラリーマンは日本社会における「労働」という、現実と不可分の存在ではなかったろうか。

レトリカルな表現ではあるが、「何者にもなれなかった」人々、すなわち「ただの人」を、日本社会はサラリーマンと称してきた。それは近代日本において「労働」と自己実現の関係が集約する語でもあったはずである。拙著は1970年以降までたどり着かなかったが、今後は同時期の、主にホワイトカラーの職域で見られた「職場と生きがい」論に特化して、「日本社会の人々はどう生きたのか」を考えたい。

（すずき・たかね 東邦大学理学部准教授）